
英雄伝説 碧の軌跡 「導力車を改造しよう」

蒼雷のユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説 碧の軌跡 「導力車を改造しよう」

【Nコード】

N2380BA

【作者名】

蒼雷のユウ

【あらすじ】

もしも、導力車カスタマイズでプレイヤーが選ぶところを、特務支援課によって選ぶ機会があったなら……？
そんな夢の会話をキャラの個性を踏襲しながら、ぶつけ合わせてみました。

（前書き）

この物語は原作の二次創作で、設定を忠実に再現していますが、話の都合上若干のキャラ崩壊があります。気にならないという方だけ、本作品をお楽しみください。

英雄伝説 碧の軌跡 「導力車を改造しよう」

特務支援課分室ビルの一階に設置する導力ネット端末で支援要請の報告を済ませたロイドは大きく身体を伸ばした。

ラフに切りそろえた茶髪に、まだ少年の面影を残す顔つきで強い眼差しを持つ青年、ロイドをリーダーとするクロスベル警察特務支援課は、度重なる支援要請をこなしながら、今まで達成してきた要請を定時連絡する為に一時休憩を挟んでいた。

ふとロイドの耳に何かを抉り取っているような、そして何らかの導力機械の稼働する、そんな二つの音を聞いた。

怪訝に思いつつ、音のする方向へと向かう。二階に続く階段を上り、裏口に出る扉を開ける。

そこは、ディーター新市長から特務支援課に支給された導力車を駐車しているガレージへと繋がっている。

ガレージには導力車は勿論、主にその運転を担当しているノエル・シーカーが導力ドリルを使って車の前面で屈みこんでいた。

彼女だけではない。音を聞き付けたのか、特務支援課の他のメンバー達、エリイ・マクダエル、ティオ・プラトー、ランディ・オルランド、ワジ・ヘミスフィアが顔を揃えている。

「皆、どうしたんだこんなに集まって？ それに、この音は何なんだ？」

「あ。ロイド」

ロイドが掛けた声に反応して、振り返るエリイ。

エリイ・マクダエル 腰まで伸びるパールグレーの髪が印象的で、その表情や物腰から良家のお嬢様のような。しかし、彼女は

れつきとした警察官に名を連ねており、腰には導力式の銃が収められている。

その次にランディがロイドを労う。

「よっ。支援要請の定時連絡、お疲れ」

ランディ・オルランド　歳は二〇歳を超えた長身の青年で、赤茶色の髪に鍛えられた体躯をした顔立ちから一見優男風の特務支援課所属の警察官である。

「僕達が各々休もうとした時に、外から音が聞こえてね。気になった皆揃っちゃったのさ。着いたら、ノエルが車をいじってたってわけ」

面白い光景を観るような視線と微笑みを浮かべて、ロイドの疑問に答えたワジ。一見美しい女性のようだが、隙の無い身のこなしや言動で男性にも思える。切りそろえられた緑色の髪が神秘的な雰囲気醸し出し、よりミステリアスな佇まいをしていた。

もう一つの疑問は、ティオが淡々と答える。

「この音は主に導力車の改造などに使われる導力ドリルの稼働音です。鉱山で使われる採掘用とは違い、コンパクトで穴あけ・締め付け・弛め・研磨・研削等の各種作業が可能にする工具です。音が近所迷惑になりがちなのが難点ですが……」

ティオ・プラトーは頭部と胸部の上に導力機器を装着している十代の少女だ。ライトブルーの髪の毛をツーサイドアップにして、幼さを残す顔立ちだが瞳は大人びた印象があった。

そんな特務支援課達の会話は全く気にしていないのか、はたまたものすごい集中力なのか、最後のメンバーであるノエルは導力ドリ

ルを使い終わり、何やら金属製のパーツを付けてナットを回していた。

ノエル・シーカー。セミロングにしたピンクブラウンの髪にぱつちりと開いた眼が凛々しい、傍から見ても真面目な印象の女性だ。ロイドとエリイと同一年だが、彼女はこの特務支援課に出自してきただばかりの元警備隊員。軍人の一人だった。その証拠に、女性らしい柔らかな曲線を描いているだけでなく、全身が鍛え抜かれており筋肉が引き締まっていた。

ロイド達も、作業中に声をかけて彼女の集中を乱したくないのか、無闇に声をかけずに作業が終わるのを待つ。

そして、それから数分後にノエルがようやく「出来た！」と歓声をあげて立ちあがった。

「うん、我ながら良い出来です！」

まるで成長した我が子を見守る親の様な温かい笑顔を浮かべるノエルに、ロイドは僅かに目を見張ったものの、直後に咳払いをして声をかける。

「ノエル、何をしていたんだ？」

「あ、ロイドさん！ 丁度今、この子の強化改造を施したところなんです」

ノエルに促されてロイドが車両のフロントへと移動すると、頑強なバンパーが取り付けられていた。これなら例え正面衝突しても、中の運転手の安全は確保される。

それを見たランディが口笛を鳴らした。

「ヒューー 随分様変わりしたじゃねえか」

「へえ……見事なもんだね」

ワジもその綺麗な装着具合に感心している様子。
そして、ロイドも同じ意見だった。

「ああ。車の事を熟知して、尚且つ定期的なメンテナンスを欠かさないノエルだからこそその芸当だと思うよ」

「あはは。この子も、定期的に掃除をしないと直ぐに汚れてきますし、イメチェンも成長を促すものですから。それに、あのZCF

ツアイス中央工房　の新型が放つこの輝きを損なわせたくないだけですよ」

ノエルの照れくさそうな返答に、エリイが微笑みで同意する。

「ふふ、ノエルさんがこの車を手に入れてから、すっかりご執心みたいね。さつき買い物に行った時、オーバルストアで入荷されたばかりの部品を買うのに相当迷った程なのよね」

「結局、自腹購入したいみたいですが。流石に経費で落とすわけにもいかなかったみたいです」

テイオの肩が竦められる。

その様子にロイドが苦笑を浮かべてしまう。

「はは……まるでみっしいグッズを買おうとしたのに、所持金が足りなくて泣く泣く諦めるべきか迷ったテイオのような状態になったんだな」

「……ロイドさん？　何か言いましたか？」

「な、なんでもありません……」

「ハハッ、テイオの天然ジゴロを調伏する様は流石だなあ」

テイオのジト目で萎縮するロイド。彼へのワジの言葉に苦笑して

いたノエルが、話題を変えるように提案し始める。

「そういえば、昨日取り寄せた月刊カーマニアで、車の外見を変える方法も載っていたんですよ。よろしければ、ここにあるリストから好みのペイントを施してみませんか？」

そうやって彼女は、傍に置いていた一冊の本を手にとって、支援課メンバーに差し出す。

月刊カーマニアとは、その名の通り、車を扱うことが趣味な人向けのカタログや専門情報を載せた雑誌である。車を製造する会社が提供する部品を載せたものは勿論、ペイントのありとあらゆる種類も写真付きで掲載されている。

そのリストを見回して、支援課メンバーは歓声を上げた。

「おお、ホントに色んなペイントあるんだなあ。思わず迷っちゃまうぜ」

「そうね。このペイントとか素敵だと思うし、これなんか支援課のイメージに凄く合うのもあるわ」

ランディとエリイが写真に映るペイント例を指さしながら、感嘆とした息を吐く。

ペイントは上品な色合いから、鮮やかな色、クールな色合いまで揃えられている。まさにいろいろどりみどりだ。

ワジがそのペイント一覧を一瞥しながら、ロイドへと訊ねる。

「ロイド、君はどんな色合いが好きだい？」

「どうしたんだ、突然？」

「何、純粋な興味さ。リーダーの好みを知っておいた方が、後々有利じゃない？」

「何の有利だよ、何の！？」

驚愕交じりにロイドが、澄まし顔のワジにツッコミを入れる。
溜め息を吐いた彼は、ペイントリストを見ながらどの色合いが良
いか吟味していった。

「やはり、これだな」

ロイドが選んだのは、偶然特集記事として紹介されていた、クロ
スベル警察のパトロール導力車だった。

スカイブルーを基調としたペイントで、側面には警察のロゴがあ
る。

「ふふ、貴方らしい好みね」

「そうかな……？ 俺としては、これが一番しっくりくるんだ。
まがりなりに、俺たちは警察官だからね」

エリイの指摘に、ロイドは頭を掻いて少し照れ臭く笑う。

後押しするように、テイオが小さく頷いて僅かに好感の表情を示
した。

「イメージ的にもロイドさんにピッタリだと思います。ロイドさん、
青いジャンパーを好んで着ているので、青く真面目なペイントを好
まれるかと」

「流石、真面目なロイドさんですね！」

ノエルもフォローするように続ける。

笑みを浮かべて礼を返したロイドは、エリイに話を振った。

「エリイの好みのペイントはどんな？」

「そうね……。私は、これかしら」

彼女が指し示したのは、柔らかい緑と白を基調としたシンプルかつポップなペイントだ。

ランディはホホー、と感想を洩らす。

「お嬢は明るい色を選んだか。てっきりもう少し派手めなのだったんだが」

「でも、エリイさんらしい穏やかなペイントだと思いますよ!」

ノエルの言葉に、支援課の総意のようにほぼ全員が首肯した。

「おや、そういえばキミのエニグマの色と似たようなペイントだね」

ワジの指摘に、エリイは頷く。

「ええ。私はこういう色が小さい頃から好きなのよね。父から初めてプレゼントしてくれたお洋服がこの色をしていたから、最も印象が深い色なの」

元政治家であるエリイの父親は、当時汚職官僚達によるクロスベールの政権闘争に翻弄されて、この街にまだ幼い娘を残して故郷に行ってしまった。その際、離婚した彼女の母親も、クロスベル自治州に居辛くなり親戚が暮らしている他国へと行ってしまった過去がある。

エリイは現在でも両親と連絡をとっているが、過去の経緯から幼い頃に経験した思い出は大切にしているのだろう。

その話を聞いていたロイドは、憂いの表情を見せなかったエリイを見ながら、そう考えた。

「……俺も、兄貴から貰った初めての玩具は詳しい姿形までよく覚

えてるよ。そういうの、なんか良いよな」

ロイドの気遣いに、エリイは微笑みを浮かべる。

「そうね。初めてというのは、とても記念になることだと思うわ。それがどんな形であれ、よく覚えるの。でも、それを抜きにしても私は――この色が大好きよ」

「ああ、そうだな。良いと思うよ。……俺も好きだよ」

同意するようにロイドは何気ない言葉を口にする。

途端、エリイが頬を赤く染めて酷く驚いた。

「え……ええっ!?!」

「……!?!」

「ロ、ロイドさん……?」

しかし、彼女だけではなくテイオやノエルも大きく狼狽を見せた。反応に気づいたロイドはしかし、彼女らの意図するところに全く気づかない。

「あれ、おかしいなと言ったかな? 俺もエリイと同じ、穏やかな緑と白のペイントが好きだな、って言ったつもりだったんだけど」

「……あ。ああ、うん。そ、そうよね。ええ、分かってたわ。(… …他意無く言われたのかと思ってビックリしたわ……)」

「まあ、こちらが勘違いしそうなただけです。そうですね」

エリイは慌てて首肯し、そして暫くしてから溜息を吐く。ノエルも苦笑で納得し、テイオに至っては無言で、未だに首を傾げているロイドにジト目を向けていた。

彼らの様子にロイド以外の男性陣は呆れ果てたり、または非常に

面白いモノをみているかのように楽しむ反応を見せていた。

「……ヤレヤレだな。こればかりはお嬢に同情するぜ」

「フフ、まあ天然ジゴロの彼らしい答えだけどね」

そんなやり取りの後、今度はランディが好むペイントを発表する。

「俺はこいつだな。その名も、ディープカラーだ！」

ディープカラー、それは重力感のあるワインレッドで大人っぽく塗られている導力車のペイントだ。特に派手な色彩が好むランディが選びそうな色合いだった。

彼らしいと支援課の全員が思ったものだが、汗も同時に流れた。

「……ランディさん、派手過ぎです」

「その色で運転や公務をして、ダドリーさんか副局長などに見られたら、どやされる気がするんだが……」

ティオが呆れ顔でツツコミを入れ、ロイドは捜査一課の主任捜査官であるアレックス・ダドリーなどの上官を引き合いに出して溜息を吐く。

ダドリーは真面目な人物だが、反面頑固であるためにランディが提案する派手なものには好まない。警察の副局長はただ体面を気にするだけなのだが、確かに警察の信用を失墜させるわけにもいかない。ランディはハハハツ、と笑いながら片腕を広げる。

「この色でなら歓楽街ではバカ受けになるぜ？　　女の子達の注

目度もアップして、ナンパの成功率もあがるぞお」

「せ、先輩……公務用の導力車をプライベートに使うのは如何なものかと……」

ランディの野望に、ノエルもロイド達と同様の態度で反論。ほぼ全員が賛同ではないことで、流石に彼も巫山戯た態度はなりを潜めてきている。

「い、いやあくまあ、派手目な色で犯人を追い詰める時に、精神的に衝撃を与えられるかな、と思ったただけだぜ？」

「でももう少し公務で恥ずかしくない清廉さを持つべきだと思うわ」

エリイが全員の代弁をランディにぶつける。それによって、彼の案は即時却下という形になった。

その後も彼はこういうのならどうよ、と様々なペイント候補を挙げていったが、その殆どが派手過ぎ、理由が不純、また少数ではあるが好みの色ではないなどの意見によって、遂ぞ受け入れられることがなかった。

すっかり肩を大げさに落としたランディは、後輩であるノエルへとバトンタッチした。

「あ、あたしですか？　　そ、そうですね……こっついのはどうでしょう？」

彼女が選んだのは、無光沢のアイビーグリーン。

「オイオイ、好きな色というか、見慣れた色じゃねえか。警備隊の車両じゃねえんだからよ」

今度はランディがノエルにダメだしを与える。

彼女が所属していたクロスベル警備隊は軍隊色が濃く、車両はグリーン系のものが殆どだ。真面目な彼女らしい選択は、警備隊時代の色を彷彿とさせる。

「そ、そういうのじゃないですよ。あたしの考えでは、その上で車体の側面に独自のペイントを加えます。特務支援課（SUS）のロゴを描くんです。市民達に一目で分かってもらえる配慮なんですよ」

自信満々に、ノエルは淀みなく言った。

この話を聞いたランディは思うところがあるのか、肯定はしないまでも悩む素振りを見せる。

そしてロイド達もノエルの考えには好意的に感じた。

数ヶ月前にクロスベルを襲った大事件を見事解決したのをきっかけに特務支援課の名は市内では有名になっていた。その支援課の犯罪検挙率は警察のエリート集団、捜査一課に優るとも劣らない。その名前を車のパトロールなどに活用する事で、名を知らしめて犯罪抑止力に繋がられるかもしれない、という淡い期待があるのだ。

素晴らしい意見だと思った。だが、しかし。

「ノエル。君の考えはとても良いと思うよ。だけど、それは支援課全体が良い影響を与えるものなんだ。これからも、導力車の扱いに関してはノエルを頼ることになりそうだし。君は、君が好きな風に改造しても、色替えしてもいいんだ」

支援課のリーダーであるロイドが柔らかな口調で考えていた意見を告げた。

それを聞いたノエルは一瞬虚を突かれた表情を露わにしたが、彼女以外のメンバーはロイドと同意見のようで、あまり驚いてはいなかった。

「ふふ、そうね。私も同じ意見よ。ノエルさんはあまり公私混同をしない人だけれど、車に関する入れ込みぶりは見ていて微笑ましくなるわ」

「はい。たまにはそんな我が俣を反映させても良いと思います」

「まあ僕はどんな色でも構わないけどね。でも強いて言うなら、あまり自分の熱を抑えない方がいいんじゃない？」

「だよな。あまり真面目すぎて遠慮なんてしなくていいんだぜ？」

お前さんのやりたいようにやってみるよ、俺みたいにな」

ノエル以外の支援課メンバー、エリイ、ティオ、ワジ、ランディもロイドの言葉に続く。

「ランディのそれは行き過ぎだと思っけど……。とにかく、ノエルの好きな色を選んで構わない。俺達全員、きつと納得するさ」

苦笑でツツコミしつつ、ロイドが改めてノエルを諭す。

ノエルはというと、突然の事に照れつつも、困惑していた。

「み、皆さんのお気持ちは嬉しいのですが……。その、好きな色と言われましても、あまりそういった関わりが無いんですよ。たまに妹のフランからこの色は可愛い、と訊かれた時に苦笑いで答えを返す事が多々あって……。気に入っているのとか、好きな色って、無いんです。むしろ、このアイビーグリーン系が慣れ親しんでいるというか、しっくり来るんです」

「そうか……。なら、これから作ってあげばいいんじゃないか？」

「ロ、ロイドさん……。？」

ロイドの言葉に、ノエルが再び困惑する。

ノエルは父親が警備隊に所属していた事もあり、幼いころからその父の背中を追って警備隊に入る為にその大半の人生を費やしている。同い年のロイドは警察官であった兄の背中を見てきたが、小さい頃の彼はまだまだ遊びたい盛りだった。歳並みの楽しい事にあまり興味が無かったノエルはその性格もあって趣味の導力車の事以外

は十五歳の頃から警備隊の訓練に没頭していた。

それも人生だろう、とロイドは理解できる。しかし、規律や趣味も大事だが、彼としてはノエル自身に好きな事を増やしてほしいと願っていた。

「俺はノエルにはもつと遠慮なんてせずに楽しんでほしいんだ。俺達特務支援課は家族みたいな付き合いになってるし、もつとお互いの良い所や悪い所も共有していきたいと思うんだ」

「そうですね。あたしも、この支援課と言う場所は凄く過ごしやすく、親しみの雰囲気がある良い場所だと思います。ですが……どうも昔の癖みたいなので、やはりそう簡単には」

「何も難しく考える事は無いさ。エリイ達と一緒にそれなりに過ごす事で、自然と身に付くものなんじゃないかな？ 勿論強制はしなけれど……ほら、君が普通の女の子みたいに過ごしたら、それはそれで素敵な事だと、俺は思うんだ」

「……え」

「……!？」

微笑むロイドに、当人のノエルは勿論の事、話を聞いていたエリイも驚きの表情を見せた。

そして彼女達ほどではないにしろ、ランディやティオ、ワジも果然然としている。

(……オイオイ、これはマジで言ってるのか?)

(いいえ。ロイドさんの事ですから、天然の可能性が高いです……)

(フフ、本当にいつも期待通りの事をしでかしてくれるね)

三人はそんな感想を抱きつつ、事態を見守る。

周りの空気の変化に、当のロイドはというと何かマズイ事でも言ったのかと少し不安な気持ちになっていた。

「ど、どうしたんだ？ 俺、何か外したか？」

「……いい、いいえ！ そんなことは無いのですが……さ、先ほどのはどういう意味で……!？」

「いや、意味も何もそのままの意味で あ」

答えている最中、ロイドは何か気付いたように言葉を止め、硬直した。

その様子を見たランディがようやく気付いたか、と思案した。

（まあ流石にそうだな。あんな言葉を言ってしまったら、そりゃ勘違いさせちまったと考えるに決まって）

ウンウン、と一人頷いている最中、慌てた様子でロイドがノエルに説明し始める。

「わ、悪い！ そういつつもりじゃないんだ！ その……別に、ノエルが女の子らしくないとか、そんな失礼な事を考えて言ったわけじゃないんだ」

（ がくっ！ ）

ランディは首を落とした。

それは他の面々も同じだったようで、特にノエルの困惑ぶりは大きかった。

「え、ええつと……そ、そうでしたか。あたしは別に気にしていないですよ?」

「いや。ちよつと無神経だったよ。変に勘違いさせてしまったんだ。済まない」

「ああいえそんな。……むしろ、別の意味で勘違いしてしまったてドキドキしたのですが……」

最後のノエルの言葉は独り言のように小さかった為、それをロイドが聞き取る事が出来ず、首を傾げるしかなかった。

その真意に気付いていない彼に、様子を静観していたエリイはややトゲのある視線で呆れた表情を露わにしていた。

(私に続いてノエルさんにまで……本当にロイドは危険人物ね)

そして、その三人の関係を眺めていたワジは、今にも笑い出しそうになるのを堪えながら、近くのティオとランディに囁いていた。

(クク、アハハハツ。まさか斜め上に期待を裏切ってくれるとは、流石は我らがリーダーだよね!)

(……人たらしもここまで来ると、とんでもないです……)

(コイツ、やっぱゼツター将来刺されるな……)

内心でそんな批判を込めた表情を出しつつ、支援課のリーダーを改めて評価したのだった。

やがて深呼吸をしたノエルが、次第に嬉しそうに微笑む。

「そうですね。ロイドさんのお気持ちは判りました。あたし、確かに堅くなっていたかもしれませんが、でも、直ぐには難しいと思うので、それは次第に、ということが良いですか?」

「あ、ああ……。無理をする必要は無いけど、そう言ってくれて良

かったよ」

「まあちよつとそういう事も気になってもいましたし、良いきっかけになったと思います。ありがとうございます」

「そうか」

ノエルとロイド、二人は嬉々とした様子で語ったのだった。

そこへワジがフォローをいれるように間へと涼しい顔で入り込む。

「ま、曹長殿は常に肩を入れ過ぎているくらいがあるよね。車の改造や選択も生真面目で遊びが無いくらいだしさ。フフ、もっとハメを外したらいいんじゃないかな、君」

彼も嬉しそうに笑みを浮かべながら軽い口調で諭す。

その甘美な口調とマスクで言われた一般の婦人ならば赤い頬のま息を吐くのだが、ノエルにそれは効果が無く、むしる眉を潜めて向き合った。

「もう、ワジ君はいつつもそれなんだから……！ 大体、ハメを外し過ぎた改造は、むしろ悪影響なんだよ？」

「フフフ……カタいことは言いつこなしさ。あんまりカタ過ぎると逆に息が苦しくなるよ？」

怒り顔のノエルにからかうように笑みを絶やさないうワジ。あまりに正反対の性格の二人は、こうした衝突も支援課では見慣れた光景だ。

そして、それをツッコミという形で止めに入るのは、いつも周りの人間である。

「そもそもカタいとかヤワイとか、そういう問題じゃないだろう…

…」

ロイドが溜め息を吐きながら口を挟む。
すっかり険悪になったノエルはワジに訊ねた。

「なら、ワジ君は一体どういうペイントが好みなの？」

「ん、僕かい？ そうだね……共和国方面で流行っている、痛車なんてどうだい？」

「い、痛車……？」

臆面もなく微笑んで提案するワジ以外は、ほぼ全員が首を傾げてしまう。

どうやら彼が発言した単語の意味が分からないらしい。その説明を、導力ネットに精通しているテイオが行う。

「……導力ネットにあがっている情報によると、痛車とは車体に漫画などの娯楽に関連するキャラクターやメーカーのロゴをかたどったステッカーを貼り付けたり、塗装を行うなどして装飾した導力車や、あるいはそのような改造のことです。語源は、『見ていて痛々しい車』から来ています」

「そうそう。大方テイオの説明通りだね」

「で、でもその痛々しい車って、万人受けじゃないのよね……？」

「つーか、俺の提案よりヤベエシロモンだよな？」

エリイとランディが痛々しい光景をそのまま想像し、眉を潜めていた。二人とも、娯楽に関わる機会があり、漫画に出てくるキャラクターがどのようなものか理解できている。そして、そのキャラクターの姿を車の塗装に使う事が、如何に普通ではない事なのかも理解していた。

というより、その塗装で街中を走りまわるのは、物凄く恥ずかしい。

くつくつと妖しい笑みを浮かべ、ワジは涼やかな声を響かせる。

「別にそこまでヤバい代物じゃないけれどね。むしろアピールとでも言ってほしいね。共和国での一部のマニアでは、そのキャラクターを塗装する事で愛を確かめたり、その強さを知らしめるらしいよ？」

「いやいやいや、愛を確かめるってどんな意味があるんだ？ とうか、一体そういう情報どこから仕入れてくるんだよ」

「フフ、共和国から来た観光客から一杯引っ掛けながら、さ。まあ、カーマニアの曹長殿はこういう情報知っていそうだけれど、お気に召さない様子だね？」

信じられないような表情をしているロイドの問いに答えながら、ワジはノエルに向かって確認をとった。

明らかに分かっていて訊ねているから、始末が悪い。

それに、ノエルも生真面目な性格なので、彼の言葉に真っ直ぐ反応する。

「そうだよ。あんなの、導力車の魅力を半減……ううん、マイナスにしてしまうのだから当然だよ！ ワジ君、まさかそいつった漫画のキャラクターをこの子に塗ってしまうの？」

明らかに少し興奮気味に言うノエルに、ワジは変わらず飄々とした態度でニツコリと返す。

「そんな訳ないさ。僕はね、この支援課メンバーのSDキャラ二頭身キャラにした全員を使った痛車なんてどうだろう、と考えているわけだ」

「えええっ!？」

それはノエルだけでなく、ロイド達支援課の面々は虚を突かれたように、面喰ってしまった。

ワジが自分達の姿を模した小さい絵を導力車の至る所に塗りたくるといふのだから、あまりに予想外過ぎたのだ。

もしそれが痛車の存在理由と彼自身の言葉を考えるならば、彼は支援課の面々への愛を確かめ、それをアピールにすることになる。

「……ま、まあ……悪い気はしないんじゃないか？」

「うーん……。ワジ君がそこまで考えてくれたなんて」

「今までそんな素振りも無かったものね」

「正直、ギャップがありすぎて、意外です……」

「フフ。さぞかし、ギャップ萌えだろう？」

「ワジもいい加減に考えてたわけじゃないんだな……」

微笑むワジと、驚きと感心をない交ぜにロイド達は彼の提案を頷いて

「……」
「……」
「……」
「……」

「……皆さん、息ぴったりですね」

テイオの静かなツツコミ。

全員がワジのペースから立ち戻り、真面目に反論を返す。

「いや、嬉しいのは嬉しいんだけどさ。やっぱり、かなり恥ずかしいというか」

「私達の姿を車の絵にしたら、なんだかいつも見られるかもしれないからかしら」

ロイドとエリィが冷や汗流して苦笑して、なんとか体裁を取り繕

った。

溜め息を吐いて、やれやれと肩を竦めるワジ。

「やれやれ、自制心が人の歩みを止めるんだね……。嘆かわしいよ」
「ワジさんの場合、自制心無さ過ぎてむしろ暴走していると思いま
す」

痛い視線を向けてティオがツッコミ。

「じゃあ、こっちは考えられるんじゃないかい？ 支援課痛車を街中
に走らせれば、支援課の広報になるんじゃないかな？」

「いやいやいや！ この場合、悪い意味の噂が広まるだろ」

ランディですら呆れ顔でワジの疑問を解消した。

「ワジ、言いたい事は判るんだけど、そういうのはいいからさ……」
「フフフ。なら、こういうのはどうだい？ 絵はロイドだけにして、
ロイドはその車で毎日“トリニティ”に居る僕を迎えに来てくれる
という、二人の愛の営みを周囲に見せつけるという」

「いやいやいやいや！？ なんでそうなるんだよっ？ という
か、ワジは今支援課ビルで寝泊まりしているんだろっ？ というか
顔が近い近い、なんで指を絡ませてくるんだ！」

「その方が面白いからさ」

面白いがるなよっ、とロイドは虚を突かれて困り果ててしまった。

ある事件をきっかけで、ワジはロイドの事を面白いという意味で
気に入っていたが、最近では面白いツボを見つけたのかこっやって迫
る事が多々ある。ティオによれば、導力ネットでは男性同士の絡み
がある娯楽があるらしく、彼ら二人の姿を見た人々は直後に「アレ、
どんなカップリングになるかな!?」という噂が流れるらしい。

エリイはその事を思い出しつつ、睨みつけるような眼を向けて静止させる。

「ワ、ワジ君……貴方ねえ。い、いくらなんでも限度ってものがあるでしょう?」

「ああ、御免ゴメン。君のロイドに迫るには、君の許可が必要だったね」

「ちょ、ちょっと!?! 私には別にそんな事を……!」

「ま、まあまあ」

赤面して慌てるエリイにノエルが落ち着かせるように話題を変えて、早急に結論に移った。

「ワジ君の提案である支援課の痛車は皆さんの賛成がないと難しいので。皆さん、どうされますか?」

「そりゃ、却下だな。俺でも羞恥心ってもんはあるしな」

「私もちよっと……」

「プライベート過ぎて、警察としての職務に問題が起こりそうだしなあ」

ランディは顔をしかめて頭を掻きながら反対し、エリイもロイドも難色を示した。

反対を予想していたのか、ワジは肩を竦めながらも笑みを浮かべたままだった。

ノエルも仕方が無いといった様子であったが、しかし唯一、ティオだけがぶつぶつと何かを呟きながら上の空である。ノエルはその様子に気付いた。

「どうしたのティオちゃん? 何か気になることでもあったの?」

「……痛車……キャラクター……支援課の絵……愛……アピール……」

…そ、その発想は無かったです。ワジさん、グッジョブです」

目立たない形で勢いが無い親指サインをするティオ。

ノエルとワジ以外は首を傾げたのだが、二人は彼女の意図を読み取っていた。

「フフ、どうも。まあ、僕の案はこうして却下されたわけだけど…
…さて、ティオの案はどうか？」

「そういえば、ティオちゃんの提案がまだだったわね。どう、ティオちゃん。どんなペイントが好きか、決まったかしら？」

エリイが車雑誌のページをめくりながらのティオに顔を向ける。
彼女の様子はどんな色が好きなのかを探しているというよりも、好きな色を必死に探している。やがて、目的の物を見つけたのか、ティオは僅かに輝く表情を見せた。

「私は既に決まっています。あらゆる候補の中、私の心を鷲掴んだペイント…：人々を魅了してやまない、最高のペイントを発見しました。これなら、皆さんも大いに使ってくれ、ドライブも公務も支障無いと判断します」

普段、クールで言葉少ない印象の十四歳の少女だが、今は何故か言葉の端々に熱い感情が含まれているようだった。

それに気付いたロイドとランディはある予感が頭を過ぎる。

「で、ティオすけ。その、ペイントっつーのは？」

ランディがおそろおそろの答えを促す。

僅かに間を持って、ティオは変わらない言葉で広げていた雑誌を全員に見えるように差し出した。

「公務中でも人々に注目され愛される、正義の体現者。プライベートでも、様々な人々の心を癒してくれる万能の存在。その名も、『みっしい』ペイントです……！」

「ってやっぱりか！ みっしいは思いつきりティオすけの好みじゃねえか!？」

みっしいとはクロスベル発祥のゆるキャラのことだ。困り顔が印象的な、丸々とした猫型のマスコットである「みっしい」。今ではクロスベルご当地キャラクターとして人気を集め、その知名度は西ゼムリア大陸において知らぬ者はいない程なのだ。

ティオという少女は、この「みっしい」という存在が大層気に入っており、インテリアやオーブメントのストラップ、果てはパジャマやスリッパまでもみっしいで統一されており、みっしいのぬいぐるみを得るためには博打をも辞さない程の入れ込み振りだ。

みっしいをティオに教えた人曰く、「どうだ？ その妙に人をイラッとさせる……じゃなくて、印象的な表情！」との事。

顔文字で表すならば（〃・・・〃）＜「みしっ」、である。彼女によって差し出している雑誌には、その顔を大きくプリントされているみっしい痛車カーが映し出されていたのだ。

「別に、私個人の主観で選んでいるだけではありません。……この愛らしい顔立ちの人々の心を和やかにさせけると同時に、平和

へと貢献しているのですつまりはゼムリア大陸を安定へと導く正義の使者、これならば警察のマスコットとしても通用するはずですそれだけではなく皆平等に接してくれる為に決して一人だけを見守ってくれたりはず、しかしながら微笑ましく見守ってくれる姿は必ずやドライブ中でのリラックスイコ効果に最適であると確信しています。みっしいの愛らしさはあの八の字眉毛に集約されておりそこから無限の愛を放出するのです。個人的にはみっしいボイス機能を導力車に搭載してカーナビゲーションをしてもらいたいものです。どうかそんな機能の実装を夢見ています。最近の研究ではエニグマに録音機能を搭載し、声を逐一記録すると言う画期的なシステムが実験段階で進行している、という話もあります。もしかすると、みっしいの声が数十万通りのパターンで記録され、カーナビゲーションの実現が叶うかもしれません、恐らくまだ数年先の話。ですが、みっしいペイントという存在はその足掛かりであると思っています。ですので、私は全てにおいて優秀な素体であるみっしいが大きくペイントされたものを強く推薦するものとします……！」

表情や声音にはそこまで露骨に現れていないものの、やはり彼女の言葉には凄まじい感情が込められており、物凄い熱のこもったマシガントークを繰り出した。

ティオのみっしいへの入れ込み振りは凄まじく、その話題において彼女は天上天下、みっしいの生みの親と同等の知識を保有し、圧倒するみっしいフリークなのだ。つた。

その事については支援課の面々は承知しており、今回に関して一番の悩みの種だった。

「オイオイ。ティオすけの眼がマジだぜ……」

「き、気持ちは分からなくもないけれど……」

「この話題をあたしが振った以上、予想していた事なんです……」

「フフフ……アハハハッ。本当にキミ達は飽きないよね。僕の提案

が、まさかの面白ろ　　いや、面倒事の始まりに過ぎなかったとはね」

「ワジ……。お前、絶対ワザと痛車の提案振ったたる……」

各々、複雑な表情を浮かべ、テイオの熱意に果たしてこのまま応えていいものか、真剣に悩んでしまった。

ここは我慢して提案を受け入れるべきか、それともテイオを落ち込ませるのを覚悟の上で妥協してもらうか、それが問題だ……。ロイドは非常に困惑してしまった。

だが、そんな事を知らず、なのか。ランデイがテイオに凄まじいツッコミを与える。

「いやいや、テイオすけよ……。そいつあ、ちと公私混同が過ぎるんじゃないか？ いや、別に俺は嫌がつているわけじゃねえ。ただ、あまりに偏っている気がしてよ」

必死に説得しているのだが、テイオの視線は徐々に厳しくなっていく。

「……。ランデイさんはみっしいが好きじゃないんですか？」

「いや……。なんつーか。嫌いじゃねえが……。好きでもねーっつーか」

「……。！ みっしいが……。好きじゃない……。？　　どうやらラ

ンデイさんには少しお灸を据える必要がありますね……」

「なんでそうなるんだっの！？　俺は子供じゃねーからみっしいが好きとは言えねーし」

その瞬間、テイオが持っていた導力式の杖

オーバルスタッフ
魔導杖

の

先端が変形し、砲口が現れた。

「半・銃形態起動テミ・ガンナー

出力を10%固定……“アプソリユートゼ

「口」

「ちよっ」

「おまつ!?!」

そこから魔法陣と共に、絶対零度の氷結弾が射出され、ランディに放たれる。

ランディは物凄い反射神経と動きで、アプソリユートゼロを回避した。至近距離からの射出を避けられたのは、かつて警備隊時代に培ったものなのだろうか、その身体能力の高さにロイド達は舌を巻く。

標的を失った氷結弾は放物線を描いて地面に落ち、道路をさながらスケートリンクのように凍らせた。

「外しました……!」

「テ、テイオすけ! なにしやがんだおま」

「銃形態に展開。オーバルドライバー、出力5%に固定」

「メ

ガゼロキャノン」!

「どおわああああああああああつ!?!」

今度は魔導杖の砲口から極小のレーザーが発射される。

これもランディは軽くよけて、難を逃れる。反撃したり、止める気はないくらいなのか、回避するのに必死だった。

二度も避けられたテイオは睨みつけるようにして、魔導杖を構え直した。

「仕方がありません。奥の手です。全砲門を解放します……」

標的を照準^{ロック}。発射準備完了。 “テイオ・ファイナーレ”、フア

イ

「

「ちよ、ちよつとまてえつ!?!」

「お、落ち着いてテイオちゃん！」

両者のただならぬ雰囲気を感じ取り、ノエル、そしてエリィがテイオの暴走を止めに入る。今度こそあらゆる意味で危険だと、ランデイを含め全員が感じていた。

流石に彼女達の制止を受け入れざるを得ないと感じたのか、テイオは魔導杖の出力を停止し、元の形状に変形。

「……流石にここまでにします。ランデイさんには後でゆっくりとみっしいの良い所を教え抜くとして、私もつい熱くなってしまうたようです。みっしいカラーに関しては、今回のところは諦めます」

若干残念そうなテイオだったが、暴走していたと自覚していたのか、バツが悪そうに小さく頭を下げた。

戦意が無くなったのを見て、ランデイはようやく一息つく。

「ふう……助かったぜ。それにしても、出力を抑えてくれてたとは言え、危ねー……」

「災難だったね」

一連の光景が面白くて、笑みを浮かべたワジが労う。

溜め息を吐いて、ロイドがワジの隣に着いた。

「面白がるなつて。……なあ。ランデイはさ、悪気があって言ったわけじゃないんだよな。テイオを傷つけずに妥協させる方法だったんだろ？」

「……。……ははっ。さて、何のことやら、だ。ロイドはポジティブに捉えすぎだっつーの。おにーさんはそんな殊勝な考えはねーつて」

ロイドの言葉に一瞬目を開いたランディだったが、直ぐにおどけるように笑って彼の肩を叩く。

それでも構わず受け入れたロイドは苦笑して「表立って行動しないけど、本当は仲間思いなんだよな……」と小声で返したのだった。

* * * * *

導力車のペイント選びは難航した。

支援課メンバー全員がそれぞれ希望するペイントを出したものの、どれも納得できるような声が無かったからだ。

どうしたら全員が好んで使ってくれるカラーが見つかるのだろうか、と提案者だったノエルがそう思っていた時。

「あれー？ みんなどうしたのー？」

可愛らしい声音で支援課ビルの裏口から顔を出したのは、まだ幼い女の子だった。ウエーブかかった肩まで伸びる黄緑髪が印象的の、九歳くらいの愛らしい姿をしている。

彼女の姿を認めた支援課メンバーは皆、嬉しそうな表情で振り返った。

「あ、キア。日曜学校はもう終わったのかい？」

「うん！ 今日には保護者面談があるからって、午後は授業がないんだー。キアの番は、明後日だよー」

ロイドが訊ねると、キアと呼ばれた少女はニッコリ笑って答え

た。

彼女は特務支援課が特別に預かっている、かつて潜入捜査に赴いた際に保護した少女である。特別な才能を持ち、とある狂信的な教団にその身を狙われていたが、支援課の活躍によって今は平穩無事に暮らしている。

ロイド達はキーアを預かっている立場であるが、実の娘のように過保護なくらい溺愛している。一般の子供達と同じく日曜学校に通わせ、家族のように温かく育てながら見守っているのだ。

保護者参観の事を聞いたエリイが思い出したように、両手を叩いた。

「あら。そういえばそんな連絡があったわね。連絡が来た後、誰がキーアの保護者として面談に向かうか、長い時間議論した事があったわね」

「まあ……結局決まらなかったの、後日改めて話し合うことになったわけですが」

「親バカここに極まれり、って奴だね」

テイオは溜め息を吐きながら肩を抜き、ワジは変わらずに微笑みを浮かべて茶化す。

トコトコと彼らの傍に寄ってきたキーアに、ランディがにやりと笑って頭を撫で始める。

「ハハツ、キー坊。単刀直入に訊くが、誰に面談へと来て欲しいと思う？」

「んー？ えーつとね……ランディは勿論、みんなに来てほしい！授業で頑張っているキーアをみんな、見守ってほしいから！」

「キ、キーアちゃん……（じいん……）」

ノエルが眩しい笑顔のキーアに感極まって嬉しくなった。

えへへ、と返すキアを見て、自然とロイドも微笑みを浮かべた。

「嬉しいよ、キア。その日はきちんと予定を空けておくよ。キアの授業風景を見るのも久しぶりだし、シスターからの評価が楽しみだ」

「うん！ ロイド、期待しててね。キア、楽しみに明後日待つてる！　ところで、みんな何してたの？　車のせいび？」

「ああ。正確には車の外見を変えようとしてるんだけど、これが中々決まらなくてさ。どうしようかと話していたところなんだ」

キアが首を傾げ、何かを考えるように瞳を上げる。その仕草は天使のように可愛らしく、見る者全てを魅了しそうな程だ。

カーマニア雑誌を持って、カラーの候補となる写真一覧をキアに見えるように広げるノエル。

「これらの中で、皆さんが候補の中を選んでほしいという事なんだけれど、好みじゃないのがあって中々全会一致で決まらないの。全員が気持ち良くこの子に乗ってほしいのですが……」

「ふーん……」

雑誌を見ながら考え込むキア。

全員が話し合っても解決できなかった事を流石に少女一人が何とかできるだろうとも思えないが。まだ仮にも九歳の未成熟な少女だ、彼女の精一杯の答えを尊重していこう。彼女の答えならきつと皆納得してくれるはず。

そう考えてロイドは考えこんでいるキアに一声かける。

「キア、無理に考えなくていいんだ。なんだったら、キアの好きなカラーでも　　」

「うん。わかった！」

「つて、もう!?!」

キーマの声に驚く一同。

「みんなが好きじゃないカラーしかないんだつたら、みんなが好き
なカラーにすればいいとおもうよ!」

「え、えつと……キーマちゃん? 皆が好きなカラーが全然見つ
かないのよ。皆が好きなものと言われても、どうしたら良いのか…
…」

エリイが非常に困惑した表情で訊ねるしかない。彼女以外の人物
も同様の反応でキーマを見つめた。

だが、答えたキーマ自身も良く判らないという表情だった。

「ん〜、なんかピカッ、つて閃いただけんだけど……でも、みん
なが好きなカラーにすれば一番良いと思うのー」

「ふうん。どうしても抽象的で判断がつかないね……」
「……………」

腕を組んで深く考え込むワジ。その姿は中性的な美貌を放ってい
る、ワジらしい非常に絵になる仕草。

同じように目をつむって自分なりの考えをまとめているロイド。
その目が光を灯ったように見開かれた。

「いや。キーマの答え、凄く良いと思うよ。俺達が共通して好んで
いる対象を選べば万事解決だ」

ロイドの言葉に、支援課メンバーがひどく驚愕していた。
尊敬する輝いた眼差しを返すキーマが歓声をあげる。

「おー！ ロイドすーい！」

「ロイドさん……？ そんな夢の様なペイントがあるんですか……？」

テイオが信じられないといった口調で、彼の真意を探る。

「ああ。実はあったんだ。俺達の好みを反映させるその、夢のカラーがあるんだ。俺達が、作ればいいんだよ！」

「マジか！？ その発想は無かったぜ！」

得心がいき、叫ぶように感嘆するランディ。

ノエルも共感したのか、力強く頷き続けている。

「うん、うん！ 先輩の仰る通り、全く想像していませんでした！ そうですよ、そういった創作していくのも、導力車を愛する者達の醍醐味でもあるんですよ！」

「へえ……流石リーダー。冴えているじゃない」

「皆賛同しているし、その方針で行きましょうか。……それで、ロイド。どんな風に描こうかしら？」

嬉しそうな表情でエリイが促す。

ロイドはああ、と応えて自らの最高の提案を開示した。

「俺達全員が共通して好んでいる対象。それをペイントにしようと思う。それは」

その答えを聞いた支援課メンバーは歓声、ないし驚愕の声が上がったのだった。

数カ月後。 某日 某時 某所

銃声と共に、激しい剣撃音と打撃音が辺りに木霊する。

警察車両として配備している二台の導力車を盾にして、制服姿の警察官が銃を持って発砲し、その前を凄まじい闘気を放つ民間戦闘集団である“遊撃士協会”の遊撃士二人が追撃する。もう二人の遊撃士が彼らをフォローし、面前の敵を牽制していた。

敵対するは五アーージュ以上の、大型の鎧と見まごうこと無き魔導兵が五体、人間達を蹂躪しようとする足を進め、その巨腕を振う。

警察隊と遊撃士達、人間の同盟部隊が強力な魔導兵と戦闘を繰り広げていた。

戦線は拮抗し、どちらも有効打を与えられていない。人間側が戦力として上であるが、魔導兵側は無限の増援とエネルギーを武器にしており、倒されども常に手勢は減らなかつた。

だが、人間側の狙いは殲滅ではない。あくまで彼らを援護し、道を切り拓く事だ。

そして、激しい攻防戦の末、魔導兵陣営を押し始め、左右に分断することに成功しつつあった。

「 頃合いか……」

呟いたのは、警察隊に居た一人の男だった。顔つきから年齢は三〇代後半だろうか。その目は細く、だが眼光の鋭さが印象的で、あごの下に蓄えられた無精髭が年相応である。大柄な身体を包むくたびれたワイシャツと黒いズボンをサスペンダーで吊るしている。

彼の手には大型の導力シヨットガンが握られており、警察隊に参加して魔導兵を狙撃していたことが分かる。

敵陣営が左右に分断されたところを見計らって、計画通りに男

セルゲイ・ロウが行動に移した。懐から通信機能を搭載した導力機器ニデマを起動させて耳に押し当てた。

「特務支援課、突入！ “道”は拓いた！ 後はお前たちに任せる！」

《了解！》

《ま、待つてください、セルゲイさん！ わ、私はまだ納得していないのですが……！ コラ、貴様ら早く車を止める！ 私はこんな車に乗るなんて聞いてないぞ！？ 今すぐに修正するんだ！》

スピードカー越しに若者達の声と、生真面目そうな男の怒声が響く。まあダドリーの奴にはそのまま我慢してもらおうしかないわな、とセルゲイは溜め息を吐いて後方へと振り返った。

大きな排気音を轟かせながら、猛スピードで道を駆け抜ける一台の導力車。

《せ、せめてこの外見だけは何とかしろ！ こ、こんなのに乗っていたら……ええい、降ろせっ。止めて私を降ろせっ！》

アレックス・ダドリーという生真面目な捜査一課の男が、今スピードカー越しに怒声と共に何かから逃れるような気恥しさが含まれて

いた。

そして彼と一人の外部からの協力者である女性と 特務支援課のロイド、エリィ、ティオ、ランディ、ワジとノエルを乗せた一台の車が坂道の頂上に達し、跳んだ。

その姿は黄緑色の長髪をなびかせた少女のキーア……の絵が大きく描かれた車だった。

前方後方側面に至るまで、あらゆる表情をしたキーアが描かれていた。

輝かしい笑顔を向けるキーア。怒って頬を膨らませて目を向けるキーア。少し寂しそうに上目遣いをするキーア。プレゼントを貰って満面の笑みを浮かべるキーア。

そして、「I LOVE KeA」と綴られている。

《き、貴様ら……絶対に許さんぞ……！ 私に、私にこんな恥辱を味あわせるとはあああああつ！？》

《今行くぞ、キーアっ！》

《キーアちゃん。あなたは私達が護るわ！》

《私達は家族です……キーア……！》

《キー坊。お前一人だけに行かせてたまるかよ！》

《突っ込みます！ 舌を噛まないように注意してくださいっ！》

《貴様ら、無視するんじゃないっ！ 私の話を聞けッ！》

《……まあ、諦めるしかないんじゃない？ 彼らの過保護ぶりは、僕も驚くほどだからさ》

《き、気持ちは分からなくもないのですが……は、恥ずかしいです……》

《み、見るな……こんな車に乗らざるを得なかった私を見るなあああああああああああっ！？》

そんな悲痛の叫びにも似た怒声に、警察隊と遊撃士達は、揃って冷や汗を流したのだった。

後日、その時のダドリー捜査官を見たティオ・プラトーはこう証言する。

「常にツンツンと照れ隠しをしていたのですが、あの時は初めてデレを見せました……」と。

(後書き)

長文ではありませんが、お読み下さり有難うございました。

壮絶なオチでありましたが、笑って頂けたら作者冥利に尽きます。

また出来る範囲で原作の設定、台詞などを再現して似通わせることに全力を注ぎました。それでも、ここ違うんじゃないか、こんな展開を間に挟むと面白いんじゃないか、こんな台詞がこのキャラらしい、という要望や指摘をお待ちしております。

原作となるゲームは皆さんの作品でもありますので、より原作に近くなるご要望なら是非それを反映させたいと思っております。

感想やメッセージの送信、もしくはツイッターなどのその旨と内容を書いてお知らせください。

共に軌跡シリーズを楽しみましょう

今年もご愛顧のほど、宜しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2380ba/>

英雄伝説 碧の軌跡 「導力車を改造しよう」

2012年1月6日00時47分発行